



## ～ 第 21 回パッションフルーツ品評会の審査講評 ～

今年のパッションフルーツ栽培は、1月から3月の平均気温が果実生育に適した温度に推移したため、果実肥大が順調に進み、大玉傾向となりました。一方、4月の台風1号の影響で、施設の損壊や塩害など栽培のあらゆる面で苦慮されたことと思います。

今年度の品評会は、6月10日に農産物観光直売所会議室において、小笠原アイランド農協、小笠原村役場産業観光課、小笠原支庁産業課、農業センターおよび営農研修所から出席した計8名の審査員によって実施されました。出品物は、父島から1点、母島から10点の計11点でした。審査基準は、出荷箱に入った果実の形状や光沢、熟度、品質の揃い、病虫害や傷の有無、品種の特性および消費者ニーズなどの商品性とし、総合的に評価しました。金賞を受賞した出品物は、果実の形状、着色程度、光沢の揃いが優れており、特に果実全体の着色程度は他出品物と比較しても群を抜いて素晴らしく、満場一致で上位に選出させていただきました。銀賞の出品物は、果実の着色程度が非常に素晴らしい逸品でしたが、揃いの点でややムラが見られました。

銅賞を受賞した出品物は形状、光沢ともによく揃っていましたが、がく痕部付近の着色不良やわずかな傷があったため、惜しくも上位を逃しました。その他の出品物も良品が多く、全体的に大玉かつ重量感がありました。一方で、果実のがく痕部付近において着色遅れがある果実もみられましたので、次年度の出品の際はご注意くださいと思います。

生産者の皆様は、生産部会内で一丸となってパッションフルーツ栽培に取り組みされており、生産者同士で情報共有を積極的に行い、常に栽培方法の改良に励まれています。小笠原パッションフルーツは、他地域産と比較して、糖度が高く程よい酸味が特色で、内地においても好評を博しています。随一の品質を誇るパッションフルーツ栽培を続けておられる生産者に敬意を表するとともに、今後もさらなるブランド力向上に期待いたします。



写真 金賞 松本農園の出品物

<吉原>

## < 審査結果 >

金賞	小笠原村長賞	母島	松本農園
銀賞	小笠原支庁長賞	父島	バウンティーファーム
銅賞	農協組合長賞	母島	濱崎農園

## ～小笠原諸島の植生回復のための取り組み～

オガサワラグワは、小笠原における自生種の1つであり、現在は、大量伐採などにより、島内では、ほとんど確認されず、絶滅危惧 IA 類に指定されています。これまで、オガサワラグワの増殖を目的とした、組織培養技術が確立されてきましたが、その後の馴化方法は明らかにされていません。

亜熱帯農業センターでは、馴化方法を確立することを目的に、さまざまな試験研究に取り組んでいます。今回は、令和3年度に実施したオガサワラグワの馴化条件の検討について紹介します。

### ●試験方法

1. 林木育種センター（茨城県日立市）で組織培養したオガサワラグワを、バーミキュライトを入れた培養瓶に植え付けて蓋をした後、発根させます。
2. これを小笠原村まで輸送し、蓋の開け方を変えて馴化させ、生存および枯死状況を調査しました。

### ●結果

1. 瓶から取り出すまでの日数が長いと枯死しやすいことがわかったため、各工程の短縮幅を検討したところ、蓋を取り外した（全開）後の日数が長いほど、葉を損傷する株が多く、枯死しやすい傾向がみられました（写真）。
2. 低温度が枯死の原因と考えられたため、培養瓶の蓋を緩めてから、苗を取り出すまで

の日数を短縮したところ、さらに枯死率が低下し、9日程度で培養土入りビニールポットに植え付けることができました（写真）。

3. ミスト装置内に移してから、枯死率を低下させるため、ビニール袋を培養苗にかぶせて湿度維持を行ったところ、枯死率が40%程度まで低下しました（写真）。



図 各工程のオガグワの組織培養苗

### ●まとめ

培養瓶から取り出した後に、高湿度条件を維持すると活着しやすく、その後の乾燥にも耐えやすくなると考えられます。今後は、より簡易的な馴化方法を模索していきます。

＜自生種担当：村田＞

## 今年度の農業者セミナーの開催について

今年度初回の農業者セミナーは、11月中旬に開催予定です。病害虫防除をテーマに計画中です。日時や場所などの詳細な内容につきましては、「村民だより」などでお知らせします。ぜひご参加ください。

## ～ 「菊池レモン」苗における温水処理条件の検討 ～

農業センターは、これまでに侵略的な外来種の対策として、パッション苗やマンゴー・レイシ苗の温水処理条件を明らかにしてきました。

本試験では導入要望の高い「菊池レモン」の耐温水性および実証試験による生育の影響を調査し、適切な温水処理方法について検討しました。なお、試験では1年生取り木苗の「菊池レモン」を使用しました。

1 耐温水性試験：鉢から苗を取り出し、根に付いた土を除去した後、表1の条件で浸漬しました。浸漬後、常温水で冷却し鉢に植え戻しました。処理後14日目までと69日目に生育調査を行いました。

「菊池レモン」では、47℃で60分間、50℃で30分間の処理では生育異常はみられませんでした。（表1）。

2 実証試験：1)の試験およびイエシロアリの死滅条件（47℃で5分）と耐温水性試験の

結果を参考に温水処理を行いました（7号鉢で育苗した苗（赤土：堆肥：パーライト＝5：2：1）を52℃の水でかけ流し、鉢内温度（中心部と内縁部）が48℃に達した時に47℃の温水槽で5分間浸漬）。処理後、苗を温水槽から取り出し、常温水をかけ流して冷却しました。そして、処理後81日目の生育を調査しました。

その結果、処理開始から最短で13分、最長で58分（平均26分）後に鉢内温度は48℃に達し、全処理（温水槽への投入と常温水のかけ流しを含む）に最短で26分、最長で77分（平均40分）かかりました。また、温水処理による生育不良はありませんでした（表2）。

これらの結果から、イエシロアリ対象の「菊池レモン」の温水処理は、52℃の水をかけ流し、鉢内温度が48℃に達した時に47℃の温水槽に5分間浸漬してから常温水で冷却する方法が適切と考えられます。

<病害虫担当：遠藤>

表1 「菊池レモン」苗の各温水処理条件における異常株数および生存株数

処理温度	処理時間	供試株数	処理後14日目までの異常株数	処理後69日目の生存株数
常温水	60分	3	0	3
47℃	60分	3	0	3
50℃	30分	3	0	3
	60分	3	3	2
55℃	30分	3	3	0

表2 「菊池レモン」苗における温水処理後の生育

	処理後81日目葉色 (SPAD) <sup>a</sup>	枝径 (mm)		枝長 (cm)	
		処理前	処理後81日目	処理前	処理後81日目
温水処理 (n=10)	63.7	4.5	8.1	22.0	65.9
無処理 (n=5)	61.4	4.5	7.0	25.0	54.0

a) 最上位の3～5節目の葉を葉緑素計 (SPAD-502) で測定

## ～ 令和4年度土壌診断の結果報告 ～

本年度、6月下旬に実施した土壌診断の傾向と対策について報告します。

診断数は、父島2戸10点、母島7戸41点でした。皆様の継続した施肥改善によって、バランスのとれた土壌が大半を占めてきています。一方で、以下のような状態の圃場がありました。

### ●高pH

土壌がアルカリ性に偏り過ぎると、土壌中の肥料成分の溶解性や可給性が変わり、肥料成分による過剰障害や欠乏障害が発生することがあります。高pHは、主に石灰資材の施用しすぎが原因です。一般的には作物が吸収するのを待つしかありませんので、石灰資

材の施用を控え、毎年の土壌診断を受け、徐々に減らしていきましょう。

### ●リン酸、カリ過剰

肥料のやりすぎが原因です。リン酸やカリが過剰な圃場では、14-14-14等の3成分が入った肥料等を使わず、硫安・過石・硫酸加里などの単肥に切り替え、過剰な成分は減らして施肥しましょう。

土壌診断を活用して、自分の圃場にどれほど肥料成分が残っているかを確認することが大切です。施肥や土づくり、土壌診断等で分からないことがあれば、農業センターや営農研修所までご相談ください。

＜営農研修所：北山＞

## ～ シカクマメの切り戻し時期 ～

シカクマメは主に島内消費の需要が旺盛で、パッションフルーツやミニトマトの閑散期となる7月から9月に収穫ができます。

シカクマメの栽培では過繁茂状態となると作業性が低下するため、小笠原の慣行栽培では7月中旬から下旬に切り戻しを実施することが多くなっています。しかし、この時期の切り戻しは8月の収量を減少させると考えられるため、需要が高くなる8月の収穫物を確保することを目的として、有効な切り戻し時期を調査しました。

3月中旬に播種し、4月中旬に定植しました。キュウリネットを用いた直立ネット仕立てとし、切り戻し時期別に3区を設けました。

全期間の総収量を比較すると、切り戻しをしない区が最も多く、次いで慣行の7月下旬切り戻し区、早めに切り戻しをする6月下旬切り

戻しの順となりました。

目的の8月総収量を比較すると、7月区はほとんど収穫できませんでした(図1)。また、A級比率を比較すると、6月区が切り戻しなし区に対して優位に高くなりました。

以上のことから、8月に収穫物を得たい場合は、6月に切り戻しを実施すると良いことが分かりました。

＜営農研修所：北山＞

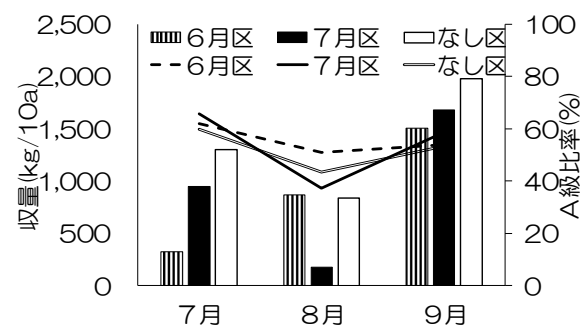


図1 7～9月の総収量(棒)とA級比率(線)